

■ iPadの 本質的価値

—— iPadのメディアとしての特性をどう
見ているのか。

西田 iPadは結局コンピュータなんだけど、メ
ディアとしての最大の価値は大きさが約B5で
あること。紙と特質は全然違うけれど、利用
形態は紙と同じで、面白い記事を見つけたと
きに、向かい合う人にそのまま手渡ししたり、

一緒に画面を覗き込むことができる。パソコン
の場合は向かい合う相手に対してディスプレイ
部が壁を作っているから、パソコンの向きを
変えてから渡さなければならない。実は、そ
のまま手渡せるというのは紙が持っていた価
値で、パソコンが置いてきたものなのだ。iPad
はこれまでコンピュータで実現できなかった紙
の使用のカチそのままの状態を手渡しでき
る。極論すれば、iPadの本質的な価値はこ
こにある。

では、だめなところは何か。重
い(Wi-Fi+3Gモデルで730g)こ
とだ。多くの日本人は電車の中
でiPadを使ってみて、これはだ
めだと思うだろう。もう一回り小さ
くてもいい。そういう意味でキンド
ルの重さ(約300g)と大きさ(約
B6)はベストなのだ。

—— iPadはiPhoneをデカく
したものだといわれるが、違い
はサイズだけか。

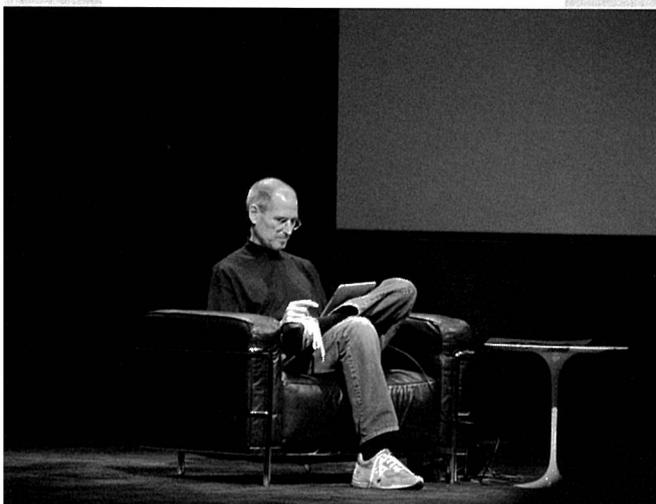
西田 機械としての本質的な
違いは画面サイズだ。これが大
きい。しかもA4サイズの資料や

web画面を見るとき、横長の画面では左右
端に無駄なスペースができるが、縦長だとこ
の無駄をかなり減らすことができるという動作
がパソコンと違うところだ。

■ パソコンの 置き換えにはならず

西田 ライターという職業柄パソコンでの作
業は単に文字を打つだけでなく、成形したり、
写真を選んで送ったりする。が、iPadにはそ
ういうことができるツールがなさすぎる。一般
的なビジネスマンのツールとしてみた場合も、
恐らく同じような不足がいくつかあるだろう。
今後ソフトが出てくれば解決される可能性は
高いが、ソフトがない現状ではパソコンに比
べて大幅に劣る。

強いのはバッテリーで、iPhoneの5.5倍の
バッテリーを積んでいるから無線LANや3Gを
使っても8~10時間は持つ。そういうパソコン
は世界でも2種類しかない。しかも1kg以下で
あり、縦でも横でも作業しやすい方向に画面
を変えられるとなれば、iPadのような機器の
価値はある。iPadはパソコンの置き換えには



iPadのプレゼンをソファに座ってやったアップル社のCEO、
スティーブ・ジョブズ氏

『iPad vs.キンドル』の著者・西田宗千佳氏に聞く

最終回

iPadの本質はこれだ！ パソコンにはなくて紙にはある価値を受け継ぐ



西田宗千佳
Nishida Munetaka
フリージャーナリスト

5月28日、遂にiPadが日本に上陸した。『iPad vs.キンドル』の著者であり、
パソコンやデジタルAVに詳しい西田宗千佳氏は、
1月28日のiPadを発表したジョブズ氏プレゼンに立ち会った
数少ない日本人ジャーナリストである。
最終回となる今回は、西田氏が実際にiPadを生活の中で使ってみて、
iPadの何が革命的なのか、語ってもらった。

(聞き手:吉井 勇・本誌編集長、構成:古山智恵・本誌編集部)



ならないが、生活の中でITの力を必要とすることはたくさんあって、これまでは無理してパソコンを使っていた。だが、これからはiPadがそこを埋めていく。ビジネスのためにパソコンを必要としない人はこういう端末だけになる可能性がある。

—— iPadはファッション性が高いといわれる。

西田 ノートPCのデザインの基本は20年間変わっていない。だからiPadの登場は、スーツしかなかった世の中にジーンズが登場したようなもの。じゃあジーンズで仕事が全部できるかという、そういうわけにはいかない。

—— アップル社のCEO、スティーブ・ジョブズ氏がiPadのプレゼンをソファに座ってやったのは、ユーザーへのメッセージを明解に示しているということか。

西田 その通り。立って使っていると辛そうだなと思わせてしまう。パソコンを使っている者からすれば、iPadになったからといって機能的にプラスになるわけではない。が、iPadを使うと便利になったり楽になったりする。iPadの良さは徹頭徹尾“楽”ということしかない。だから楽なスタイルで見せる。

日本流電子書籍 ビジネスをつくる会社

—— ソニーと凸版、KDDI、朝日新聞の4社は合同で電子書籍配信事業に関する事業企画会社を設立すると、5月27日に発表した。

西田 日本で電子書籍ビジネスをやる上で出版社が懸念しているのは、販路がKindleやアップルに独占され、日本の出版の多様性が失われることだ。米国の販路しかないことの大きな問題は、日本と米国のカルチャーの違いでエロや暴力シーンがすべてカットされることにある。お茶の間で人気のアニメ『サザエさん』のワカメちゃんのパンチラも米国では許されない。ただ噂によると、アップルも出版物に関しては許諾の内容を大幅に緩める動きがあって、エロも文芸的な描写に関しては

流通を許可するらしい。こうした電子書籍ビジネスを日本で展開していく上での課題がソニーのeBookの責任者である野口不二夫・米ソニーエレクトロニクス社Deputy Presidentを中心に議論され、日本の市場に合ったビジネスをするために、今回の事業企画会社設立となった。

新事業会社の目的は、さまざまな端末で読めるコンテンツをお客さんに提供できるオープンなプラットフォームの整備を図ることにある。コンテンツとは書籍やコミック、雑誌、新聞などのさまざまな出版物を意味する。どういうルールで本を集め、どういうサーバーで運用するか、どういうルールで分配するかなど、詳細はまだ決まっていないが、ビジネスプラットフォームは参加4社以外のほかの企業にも広く門戸を開くといっている。そこで野口氏に、プラットフォームをオープンにやるとはどういうことかと聞いた。野口氏は「オープンとはフォーマットではなく、プラットフォームそのものをオープンにして、プラットフォームのやり方に基づいた書店をいくつでもつくれるようにするという意味だ」と答えた。アップルやアマゾンはそのやり方を絶対しない。だとすると、ビジネスという観点から見ると多様性があるということである。

—— 誰でも参加できるプラットフォームをつくるということは、競合他社も参加してくる。

西田 だとしても、フレームワークを最初につくったというプライオリティが彼らにはある。

—— 新会社のトップについて。

西田 レコチョクの元代表執行役社長の今野敏博氏(6月24日付けで退任)が就任した。レコチョクはケータイ向け音楽配信事業をしていて、着うたの権利処理をやった、コンテンツを実際に売っている。デジタルコンテンツをマスに売っている人でビジネスデシジョンができる人ということで、今野氏に白羽の矢を立てたのだろう。



新会社設立発表会で、写真左から朝日新聞社の和気靖デジタルビジネス担当、凸版印刷の前田幸夫取締役、米ソニーエレクトロニクスの野口不二夫上級副社長、KDDIの高橋誠取締役

“板”だけではない 日本の電子書籍ビジネス

—— いよいよ電子書籍の流通ビジネスが日本でスタートするわけだ。

西田 ソニーはeBookリーダー「Reader」を年内に国内で販売する。アマゾンが国内で電子書籍ビジネスを始める計画をしているのだから当然だろう。さらに新会社として、アマゾンがこのフレームワークに乗ってくるのであれば排除するものではないとしている。アマゾンは現在も日本の日販やトーハン、大手出版社の販路から書籍を仕入れてネット販売を行っている。アマゾンやアップルは日本のルールをある程度飲む代わりに、自分たちに少しでも有利な条件がほしいというスタンスなのだろう。

ソニーは新会社社様の電子書籍端末の発売を公言しているが、実際には、新会社が端末の種類もメーカーも定めていない。iPad用、iPhone用、アンドロイド用のビューワを作るともいう。ソニーはiPad用、iPhone用、アンドロイド用のビューワをすでに作っていて、もうすぐ米国で発表する。米国にはケータイで読める電子書籍がなく、Kindleからスタートしているから“板”=電子書籍だけど、日本の場合はケータイで読める書籍があるわけだから、“板”以外に売ったっていい。つまり、端末を選ばない流れになりつつあるということだ。